

松村先生にまつわる話

「松村先生」

松村先生が門下外の私に声をかけて下さったのは大学3年の時です。私の管弦楽作品(日本音楽コンクール)に「君のを聴くといいよのない恐怖感を覚えた。でもあれだけ持続する迫ってくる音響は買った」というもので内心うれしくも複雑だったのを覚えています。次に修士過程の1年のとき、別の管弦楽作品(交響楽振興財団作曲賞)に「君のは今回はよかった。たくさんのお客様に囲まれて幸せだと思いなさい」といただき、このころから奥様も「まさかど、しっかりやんなさいよ」とコンサート会場などでわざわざ声をかけて下さるようになりました。この時の作品が翌年再演されたとき、先生は「私は今回感動しませんでした。大きな音がすれば満足というのは卒業したほうがよろしい!」と思ってもいまいご感想を公衆の面前でいただいてしまいます。同じ曲なのに内心不満に思い、観客の大爆笑のそしりを受け、その後のレセプションでは恐怖で棒立ちしていると、先生が私に迫って来られ「さっきはちょっと言い過ぎた。ところで君はお酒は飲めるかね。麻雀はするかね。テニスはやるかね」と。当時どれも苦手だった私は

首を横に振りながらお返事すると「そうか、君とは友達にはなれないな」とポツリ。そのお言葉に作品の本論に入れなかった残念さと同時に安堵もし、図々しくも「それでも次の作品を先生に見ていただくことは可能ですか」とお伺いを。「はっきり言うが僕は君に要求することがあるけど君と僕はレッスンでは出会わないほうが良いと思う。とにかくどんどん書きなさい」とおっしゃりレッスンはついに一度も実現しませんでした。あの時(芥川作曲賞選考会)、私との話を終えられた先生は山田泉氏、小山薫氏、江村哲二氏とそれぞれ決して穏やかでは済まない問答を展開され、一番年下の私の心拍数は最高に上がっていました。他の選考委員で武満徹先生、そして松村先生の私への怒りを全力で静めて笑顔に戻して下さった黛敏郎先生。興奮しながらご一緒できた方々がすべて他界されておられ、今の私には終生忘れられない貴重な一日です。それから8年後、松村先生をお見かけする機会はどんどん減ってきたころ。私の室内楽作品が再演されることになりましたが、予定の演奏家から「主催方が、『まさかど』という名前を知らないことから、著名な方の作品に変更をと

言われてしまい再演できなくなった」と電話がきました。現代ものはあまり演奏されないような大きなクラシックコンサート故、私の不徳というしかなく意気消沈しました。一方で別の人選をすべく主催方が相談されたのはなんと松村先生だったと知ったのは随分後のことでした。その時「『まさかど』、あいつのは多分面白いはずだから演奏すれば良い」と付言して下さったようなのです。そんなわけで私の入る隙間のないメジャーなコンサートでいつの間にか無事再演の運びとなりました。狐につままれたような感覚でしたが、内実を知り得たのが年の瀬で、とりあえずお年賀状で御礼を書きました。返信をいただきましたが門下生が代筆しているものだったため、ご負担をかけてはいけないと以降は控えたも

のでした。これもあとにわかったのですが代筆したのは同期の松村門下でした。ついにきちんと御礼を言えずじまいなまま時は過ぎてしまいました。

初めて先生との出会いは浪人となる芸大入試。バイオリンのソロを8時間の試験で書き「君ねえ、ソロは繊細に表情を書かなければいけない。君は何を考えているんだね！」と一喝され玉砕した18才の春。「こんな怖い先生の門下でなくてよかった」と入学後も決して近寄らなかったのに、節目でいつも声をかけて下さった先生と奥様。本当に感謝の気持ちしかありません。アプサラスの会は素晴らしい門下生がたくさんいらっしゃるので今後も末席に置いていただこうと考えています。

正門憲也